



「音が舞う」天井の拡散体

音響実験の結果、天井空間には拡散体を設置。試行錯誤の末、音が舞い降りるように「鳥」をイメージしてデザインされた。天井の凹凸も、実験の結果、エコー対策として生まれたもの。

Point



Point

親近感を高める 舞台の高さ

舞台の高さを床面から0.75メートルと低く設定。一階の前方からでも舞台の床が見え、演奏者の上半身だけではなく足下から立体的に見られる。

4



Point

音楽を共有できる アリーナ形式

二階と三階のバルコニーサークルができ、ピープルウォール（人の壁）が生まれて、一体感を演出。

5

Architect Profile



美濃 吉昭

AE建築設計事務所 代表
元大成建設株式会社 設計部
課長としてザ・シンフォニー
ホールの企画・設計を担当。
アリーナ形式、“残響2秒”と
いう、当時としては画期的な
クラシック音楽専用ホールを
完成。

海外20カ所以上のホールを視察。
設計当時、30年以上も前の資料を
今も大切に保管されている。



した演奏家の奏でる音を感じながら聴いてもらうものです。ホールの聴衆が席に座って目にするのは、まず正面、次に天井です。だから、音楽ホールでは天井を含めた空間全体の雰囲気づくりが大切です。

ザ・シンフォニーホールの正面には堂々たるパイプオルガンが据えられ、荘厳な雰囲気を作り出している。また、天井を見上げると、三角形のような形をした音の拡散体が幾つも吊られている。「音響担当者から、天井に拡散体をつけてほしいと要望があり、このデザインを着想するまで試行錯誤を重ねました。ザ・シンフォニーホールの美しい「音の響き」が、天から舞い降りてくるように、鳥の円舞をモチーフにした天井空間のデザインなんです」。

残響2秒の豊かな響きと美しいデザイン、設計家の想いが融合し、あるべき姿となって飛翔を遂げたのかもしれない。

「先日、ザ・シンフォニーホールでブルックナーを聴きましたが、久しぶりにホールに入るとアットホームで親しみやすさを感じました。」家庭的な雰囲気ね“とつぶやいた妻に、音楽というのは、オケを囲んで皆で聴くものなんだよ“と話しました”と美濃氏は語る。

ザ・シンフォニーホールでは、舞台の四方を客席で囲むアリーナ形式を採用。また一般的なホールと比べて**舞台の高さを低く設定**している。その効果について美濃氏は説明する。「舞台を囲むことでさまざまな角度から観ることができず。また、舞台を低くし、演奏者を足下から眺める

客席でつくられた“人の壁”が、 ホールの一体感を演出

ことができ距離も近く感じられ、臨場感が生まれます」。

確かに、ザ・シンフォニーホールは、一階の最後列や、二階と三階からでも舞台が見やすいと定評がある。

「演奏者がはるか彼方にあり、川の向こうから鳴る音を聴いているような、音が見えない“ホール”をつくりたくはありませんでした。だから、演奏者と観客が音楽とともに楽しむことができる“音の見えるホール”をカタチにしたかったのです」。

さらに、美濃氏は続ける。「アリーナ形式にすることで**二階と三階のバルコニーサークル**ができ、**ピープルウォール（人の壁）**が生まれます。また、舞台背面にも観客が座ることで、観客同士が自然に互いの顔を見合やすカタチになります。人の顔が見えると、ホール全体に**一体感**が生まれて、感動を分かち合えるんですよ」。

クラシック音楽専用ホールとは、味気のない単なる箱でも、過度な装飾に彩られた空間であつてもいけない。「**巨大な楽器**」として、演奏家と観客がともに奏でる“豊かな音”が見えるようにデザインされたのがザ・シンフォニーホール。

設計者たちのホールへの強い想いが込められたその姿を、これからずっと、大切に受け継いでいきたい。

次号ではザ・シンフォニーホールの音響設計についてご紹介しします。ご期待ください。



「音が見えるホール」をデザイン

「ホールは巨大な楽器」という考えのもとに、外観と内観に「音が見えるホール」を設計されたザ・シンフォニーホール。これまでにない、残響2秒の美しい音を奏でるクラシック音楽専用ホールにふわさしいデザインとは？ その設計家のこだわりや情熱を綴る。



「白いピアノ」を描いた外観

“巨大な楽器”をイメージして、外観は“白いピアノ”をデザイン。木々の緑とのコントラストが美しく、街並に調和している。

Point



期待感膨らむ正面エントランス

広い階段、列柱から成るエントランス。訪れる人に特別な気分と期待感を演出し、自然と二階へ足を運んでもらえる仕掛けになっている。

Point

「空間をデザインするということは、単なる装飾を施すということではありません。ザ・シンフォニーホールの外観も内観も、音楽ホールにふさわしい機能を考え、上でのデザインです」。そう語るのは当時、大成建設株式会社で設計のチーフを担当された美濃吉昭氏。

「ホールとは、音楽家が奏でる音に適切な響きを加え、熟成した音楽として観客に届ける“巨大な楽器”」。その考えに基づいて、ザ・シンフォニーホールの外観は「**白いピアノ**」をイメージしてデザインされた。

また、外観を設計する上で、美濃氏が特に工夫されたのは**正面エントランス**だという。ゆつたりとした広い石段を配し、白い柱を並べて優雅なコロネード仕立てにし、日常から離れた**特別な雰囲気**を演出。訪れる人を知らず知らずのうちに、二階まで足を運ばせ、二階のホワイエに入る扉へと導いている。

「万ホールの内観デザインに関して美濃氏いわく「演劇の場合、客席を暗くし、額縁の中の明るい舞台空間を観てもらいますが、音楽ホールは違います。ホール全体に充滿

外観も内観も、 “音楽ホールらしさ”を追求